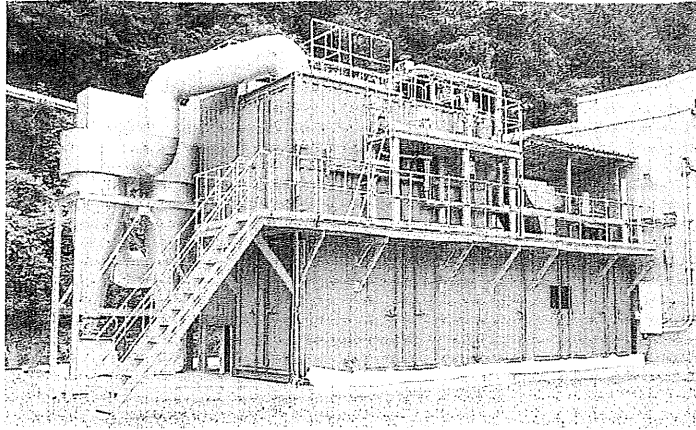


国内で初めて稼働した小型回転型燃焼炉RPFボイラー。
秋田屋本店グループのSDGs活動に貢献する



同工場の新エネルギー棟は建物面積約3500平方メートルで、設置工事などに約4億円をかけた。マルエイがRPF製造業者のエコムカワムラ(本社・岐阜県輪之内町、川村一男社長)から燃料のRPFを購入・燃焼し、ボイラーで発生した蒸気を秋田屋フーズに販売する地産地消のエネルギー供給事業スキームとなる。

燃料庫はRPF約100トン(最大10日分)を貯蔵でき、10トンタンクで直に投入できるよう高さ10メートルに設計。送風ファンと誘引ファンで燃焼を制御する回転型燃焼炉は1千度Cの高温で稼働、燃焼能力は毎時660キログラムと

なる。燃焼熱を蒸気に熱気換するボイラーの蒸発量は最大で毎時3トン。RPFはメリアルリサイクルが困難な廃プラスチック類(7/8割)や古紙を主原料とした、高品位で産廃問題を解決する固形燃料。製造時に出る食品残さを特殊工程で燃料化するため、ゼロエミッションにもなる。

同工場は食品の生産工程に必要な殺菌用の蒸気をA重油ボイラーで作っていたが、原油運動のため燃料価格が変動する悩みがあった。これを国内の地元業者が製造したRPFを調達することで、燃料価格の安定化と年間1500トンのCO2排出

マルエイ秋田屋フーズに貸与

RPFボイラー稼働

マルエイ(本社・岐阜市、澤田栄一社長)は、開発を進めてきた廃プラスチックを燃料

とする小型回転型燃焼炉RPFボイラーシステムを稼働した。設置先は、はちみつやローヤルゼリーを製造販売する秋田屋本店(同、中村源次郎社長)の子会社、秋田屋フーズの洞戸工場(関市)で、8月24日に竣工した。ボイラーシステムを秋田屋フーズに貸与するかたちでマルエイが稼働させる。

申部

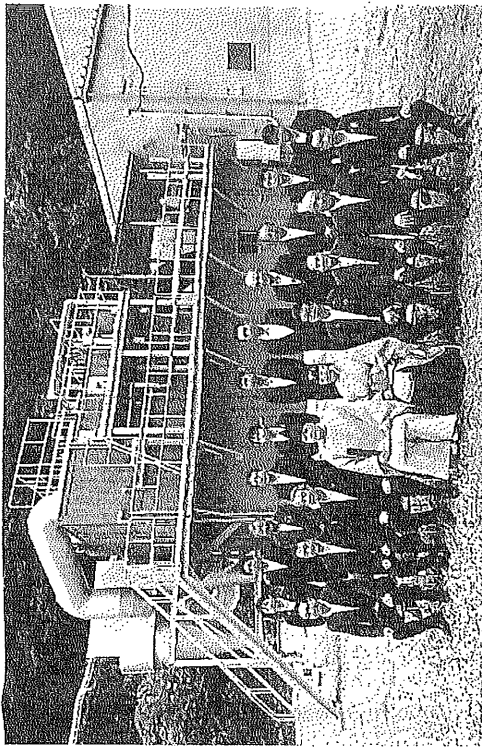
◇名古屋支局◇
名古屋市中村区
那古野1-38-1
星光ビル5階
☎052(566)2290
FAX052(566)2291

削減(排出係数に準じて計算)、カロリーベースで調整した場合のCO2削減量13%を見込む。また現状の価格水準で年間約2千万円の燃料費が削減できる算段から、今後はその削減額で省エネ機器への取り替え提案や排出権を購入する新たなスキームも検討する。

地球のために寄与していければと思いを述べた。マルエイは日本のエネルギー政策の基本的概念「3E+S」の観点から多様なエネルギー源を組み合わせて活用することが脱炭素社会を目指すうえで必要で、廃棄物を新たな価値あるエネルギーへの取り組みにつながることを考えている。

澤田社長は「各方面から関心を寄せられておられる」と現況を話した。

中村・秋田屋本店社長は「まさにSDGsを代表するシステム。ここから全国、世界へと広がり



竣工したボイラーと関係者
秋田屋フーズ洞戸工場では、生産工程で使う蒸気を従来はA重油で生産していたが、海外情勢による原油価格の影響、2050年のカーボンニュートラル実現などの点から石油

マルエイ(岐阜市、澤田栄一社長)が秋田屋フーズ洞戸工場(岐阜県関市)に設置を進めていたRPFボイラーシステムの設置工事が完了し8月24日、現地において竣工式を行った。

RPFとは、Reuse derived and plastic condensed Fuelの略称。主

に産業系廃棄物のうち、マテリアルリサイクルが困難な古紙、およびプラスチック類を主原料とした高品位の固形燃料。マルエイは、岐阜県内のRPF製造業者とタイアップし、ボイラーの燃料としてRPFを有価で購入。ボイラーの燃料として使用して蒸気を発生させ、この発生した蒸気を秋田屋フーズ洞戸工場に販売する。

代替燃料を探していた。RPFボイラーで製造した蒸気の利用は、これらの問題に対して有効であるほか、CO₂排出量を一部減らすことにもつながりSDGs(持続可能な開発目標)の一環にもなることから、今回の設置に至った。

RPFボイラーは、燃料ヤード、回転型燃焼炉、ボイラー本体(蒸発量最大3.0t/h)、制御盤、サイクロン(燃焼した排ガス中に含まれる大きな目のちりを取り除く装置)、バグフィルター(排気ガスに含まれるより小さな粉塵を取り除く装置)で構成されており、燃料ヤードにはRPF燃料を約100t(最大10日分)貯蔵でき、製造した蒸気は配管を通して同じ敷地内の秋田屋フーズ洞戸工場に販売される。

マルエイ 廃プラスチックで蒸気製造 秋田屋フーズのRPFボイラー竣工